

長男貫一郎は東京鎮台に徴兵され、明治十年二月、西南戦争で戦死した。次男銈吉郎は東京に赴いて西洋医学を学んだ。しかし、三十五歳で病死した。

三男、四男は、すでに夭折していた。末子徳太郎は医師にはならなかった。しかし、その次男宗次郎が、やがて医師になった。

明治二十四年二月に死んだ船橋宗恂の墓は、豊島区雑司ヶ谷の法明寺にある。

(日本医科大学)

前田慶寧の病状記録について

寺 畑 喜 朔

昭和五十五年石川県の郷土史家大鋸彦太郎氏は死去した。死後遺族から同氏が長年にわたって蒐集した歴大な資料を「大鋸コレクション」として、石川県歴史博物館へ寄贈された。また、このコレクションは整理中であるが、過日、同学の今井一良氏から前田慶寧の病状記録のあることの指摘をうけた。

この記録は和紙五葉に綴られており、登場人物の史的背景からみて、明治五年の加賀藩第十四代藩主前田慶寧の病状記録(診断書)である。診察したのは、大学東校のテオドール・ホフマンと佐藤尚中で、ホフマンの和訳を担当したのは三宅秀である。

この綴の標題は「御容子書」で「忽布満 尚中 二氏ノ按」とあり、その内容はつぎのようである。

此患者左右両肺ニ結核ヲ以テ盈實シ就中右肺ヲ多トス

加フルニ右肺下端當リニテ肺炎ヲ発セリ蓋シ結核患者ニ於テ屢々兼発スル者タリ而シテ其症漸々増進スルニ至リテハ肺膜間ニ水液ヲ滲出シ未タ結核ノ為ニ圧迫ヲ受ケサル少カニ殘餘セル健全ノ肺ニ向テ推力故ニ肺炎ハ一箇ノ可怖合併症タリ其ノ此ヲ避クルノ法方有リトイヘトモ多クハ暫時病勢ヲ減退セシメルニ有テ再発スルコト屢々ナリ

預後恐ラクハ数月ヲ越ユスシテ斃ルヘシ若シ上ニ説話セル肺炎劇甚ニシテ滲出ヲ速ニスルトキハ尚速カナリ然レトモ肺炎ヲ療シテ全其病患ヲ除去スルコト能ワサルニ非ス幸ニシテ原病ハ殘ストイヘトモ肺炎再発セサルトキハ撰生ト藥効ノ力ニ因テ健全ニハ復セストイヘトモ尚數年之生命ヲ保続シ得ヘシ

療法 祛痰消焮ノ目的ヲ以テ處方

吐根十氏 實麥多利私 一匁

右沸湯五匁ヲ以テ浸出シ後藥ヲ加フ

甘草膏 二匁

毎ニ字一食七嘔氣ヲ催スコトアラハ半食七宛与フヘシ此劑ヲ用ユルハ但ニ劑ヲ反復スヘシ若ニ劑ヲ用終ラサル

前ニ口内苦味ヲ覺ヘ或ハ胆液ヲ吐出スルコトアラハ直チニ後服ヲ止ムヘシ 今熱氣盛ナルトキハ含窒素ノ滋養食物ヲ与フヘカラス只生乳或ハ熱煎乳ヲ与ヘ少許粥ニ生乳ヲ加ヘタル者等一切消化シ易キ者ヲ撰用スヘシ若デギタリス劑ヲ用テ後三日ニシテ熱ヲ性減セサルトキハ規尼涅六氏ヲ朝第十字ニ服セシメ又十一字ニ与フヘシ此ノ二回ノ規尼涅ニ由テ解熱スルコト明ナルトキハ食餌ヲ一變セシメテ肉羹汁鶏肉鳩肉ヲ与ヘテ可ナリ其熱〇ケ解散セハ鶏卵麥酒ヲ与フルコト亦可ナリ至此時ハ消食機能ヲ振ハシムルノ目的タレハ重炭酸曹達ヲ与ヘ且實麥汰利私劑モ二劑ノ後ハ単味の吐根浸トナスヘシ

九月八日 教師忽布滿案 三宅秀譚

五日後、慶寧を診察した佐藤尚中は、

御性質薄弱ニ被為本日處此度拜診候ニ御所患ハ右肺鎖骨下部ニ當リ候處ニ結核ヲ生シム萬症斯ニ基キ或ハ咯血或ハ肋膜炎ノ発シ統テ寒熱往来腸胃不化ノ症状併発候儀モ御座候当分為善御病症ニモ有之間布候得共行々之處如何有之哉心配仕候也

九月十三日 佐藤尚中

この二人の診察を受けた前田家（根岸邸）では侍医江間三吉（萬里）が中心となり、鋭意慶寧の加療に努めたことは、十分推察できるが、この病状綴に江間は同僚侍医の長谷川六藏に宛てた文書の控を残している。

御容體当八日御達候後六字頃獨逸教師ホフマン来診即チ譯案ノ通ニテ恐歎仕候翌九日ヨリ御発熱次第ニ薄ラキ肋間ノ御痛モ漸ク微ナリ其后今日迄追日御解熱随テ御咳痰モ稀少御食餌増加夜間静臥御尿利適宜御附腫半ハ消散已ニ御肋痛ハ現今ニテハ無之候様ニ被為成候下先肋膜炎ハ退却イタシ候様奉診候舜海毎二日来診御薬剤同方調進仕候ナリ余等ホフマンノ説ニ左視スルト雖モ既ニ前年之事故ニテ洋人治療ハ甚以恐憚被遊強而御勸メ可申モ如何布ト因 罷在候處（挿入文、今日消炎祛痰ノ場合ニ御成リ被遊左スレハ）舜海ノ薬剤モホフマント霄壤スルニ非ス依前依頼仕候尚兩人御容體書御比照可被下候御病源ヲ論スルニ至テハ略同ト雖モ軽重ヲ論スルニ於テハ異ナル所アリ何分黒川氏等京着候上御療治転替ノ所熟ト面儀可

仕候条其付後源也

九月十三日 江間三吉

長谷川

慶寧は療養を続けるが、病状は一進一退し、ついに「七年四月恭敏公病あり熱海に如きて療養す存再差之す五月に追ひて漸く篤劇なり十日公熱海に赴きて之を省し逗留して看護す十八日恭敏公遂に薨す」（淳正公家伝）となる。

（金沢医科大学）